原爆の日の記憶

長島昭子
中野二丁目

私が被爆したのは十七歳の時で、場所は広島市内の旧制女学校の校舎内であった。

当時は動員令というものがあって、私共はあまり勉強はさせてもらえず、市外の日本製鋼所の工場に、勤労動員学徒として通っていた。しかし、その日は、たまにしかない登校日だったのだ。

五〇年近く経つ今でも、あの日の朝の晴れた夏空の輝きは忘れられない。その何十分か後に広島の街は、火の海に覆い尽くされてしまったのだから……。

久しぶりの登校日に私は少しはしゃいで、廊下で石風呂さんや高山さんとおしゃべりしていた。しかし何となく一時限は体操だったのが気になって、

「先に出てるよ」

と、声をかけて渡り廊下の靴棚の前まで来た時、一瞬!! 青い閃光に目が眩んだ。あっと思う間もなく強い力で床に叩きつけられた。瞬間、爆弾だ!! と思った。

どの位の時間がたったのだろうか、気がついたら辺りがまっ暗だ。立とうとしたが頭がつかえる。足に何か乗っている感じだが、両手は自由に動かせる。

「お母ちゃあん」「助けてえ」「痛いよう」

と、下級生らしい声が方々から聞こえる。私も心細くて、(助けてえ)と叫びたかったが、代わりに、

「しっかりしんさい、今に助けに来てくれるけん」

と、自分を励ますつもりで叫んだ。しんと静かになってから、長い時間待っていたような気がする。左足が痛いので抜こうとしたら、

「痛い!」

と、誰かが言った。友の体の下に私の足があったのだ。後で聞いたところによると、彼女は恥骨骨折だったそうだ。

僅かな光が頭上に見えた。その光を頼りに遮二無二(しゃにむに)辺りの瓦(が)礫(れき)を取り除いた。渡り廊下の屋根だから大した量ではない。体が通れる位の穴ができたので抜け出した。私の後から何人か出

てきた。出て見て驚いた。誰も助けに来てくれない筈だ。校舎は全部潰れて、鉄筋コンクリートの体育館だけぽつんと立っていた。遠くにある筈の山の連なりが、すぐ近く手に取るように見えていた。

呆然としたがよく見ると、肩や腕に血が滲み、着ているものは破れ汚れて見るかげもない。左足が痛く、靴を履く前だったので裸足である。

原子爆弾の恐ろしさは後から解ったことなのだが、もしもあの時に運動場に出ていたら、体は光線に焼け爛れていただろう。もしもあの時にまだ、教室内にいたとしたら、潰れてしまったか、或いはその後の火災で焼け死んでしまったであろう。

ふと我に返ると瓦礫の向こうから、体操の立花（女）先生が何事もなかったように、いつもの良い姿勢で歩いて来られた。会釈をしたが気付かず防空壕の方へ行かれた。私もついて行こうとしたが後ろからはっきりと、

「小川さん！小川さん！（旧姓）」

と、呼ばれた。声のした方を見ると、潰れた校舎の奥に川上（女）先生の顔があった。若くて美人の家庭科の先生だ。恐ごわで瓦礫を取り除いたら出ていらした。頬から首にかけて沢山の血が流れていた。重症らしいのにしゃんとして、

「まだ奥に生徒がいるから」

と、指図されたので、また恐る恐るしゃがんで入った。割烹教室の跡で、荒い場の御影石が生徒の足に乗っていて動けないのだ。一所懸命石を持ち上げて、声をかけたが動こうともしない。仕方なく石を横にずらして、先生と一緒に少しずつ、引きずって出した。

防空壕が仮の本部兼救護所にされることをかねて聞いていたので、そちらへ行きかけた私の前を、地歴担当の田中（男）先生がふらふらと、まるで風に吹かれるように通られた。此の世の人とも思えぬその姿にぞっとした。敬愛する大好きな先生だったので、その詳細を記すに忍びない。

田中先生は生徒を引率して、朝から建物疎開に行って被爆され、生徒全滅の惨状を報告の為に帰校されてから、数日後に亡くなられたと後に知った。ご冥福をお祈りする。

突然、校庭を大柄な生徒が走り出した。全裸のままで何やら叫んでいる。ショックで気がおかしくなったらしい。理事長の山中（女）先生が大声で早く着せるようにおっしゃる。いつも生徒のことを心にかけていて下さるのだ。長身の新任の先生（男）が、この学校の生徒は役に立たない、統率がとれない、などと怒鳴っていらした。きっと先生も夢中だったのだろう。私も無我夢中でいまも記憶は切れ切れである。何年か後に再会した友人が、

「あの時に校庭の藤棚の下で会ったね」

と、言われた時、私には何のことか解らなかったが、徐々にお

ぼろげな記憶の下から、そういえば会ったんだ！　とあの日の様子が思い浮かんでくるのだった。

やがて大勢の兵隊さんの姿が見えて、救助活動が始まった。瓦礫の下から次々に運び出される負傷者。だが薬も包帯もない。私の大切な品を一緒に入れた救急袋は、教室に残したままだった。どの辺りに埋まっているものやら探し出すすべもない。

なぜかどの人も顔が水ぶくれになっている。原爆症の火傷と知る由もなかった。救護所へと掌を握ったら、掌の皮がつるりとむけてびっくりした。どの人も水を欲しがったが、飲ませてあげる水もなかった。図書室だった辺りで腰から下が抜け出せない人がいた。兵隊さん数人が棒をてこにして、持ち上げようとしたがびくともしない。彼女は兵隊さんや私に向かって、

「早く助けて」「お願い何とかして」

と、哀願していたがだんだん物を言わなくなり、うつらうつら眠り始めた。兵隊さん達は、

「もう駄目だ」と、意を決して次の救助に走って行った。私も心が残ったが（ごめんね）と、手を合わせて去った。今でも思い出す度に心が痛む光景だ。

校庭のはずれの川土手にびっしり並べられた負傷者の中に、石風呂さんを見つけた。さっきまであんなに元気だったのに、手や足にかなりの傷だった。声をかけたらかすかに返事をした。なす術もなく見守っていたら、兵隊さんが担架で次々に負傷者を運んで行く。江田島や似島（にのしま）へ運ぶのだという。石風呂さんの担架を追いかけて、

「元気になったらまた会おうや」

と、言ったらうす目を明けて

「ええ」と、返事をしてくれた。それが最後になった。しばらく後にご両親の疎開先へ尋ねて行ったら、その少し前に私が出した手紙が仏壇に供えてあった。以後石風呂さんは消息不明で、遺骨すら無いという。

夏の日は長い筈なのに夕暮れの気配がしたのは、まわりが煙りに包まれ出した故なのか、倒れた校舎の端から火の手が上がり、みるまに炎に包まれていった。土手の上から悲痛な思いで眺めていると、すぐ横に山中先生が立っていらした。今は亡きご夫君と築き上げて来られた学校で、広島女高師をも併設した付属高女として発足して、まだ数年しか経っていなかった。どんな思いで焼けていく校舎を見ていらしたことか。それなのに私の裸足を見て、

「これを履きなさい」と、下駄を揃えて下さった。手に持っていらしたのはその下駄だけだったのに……。紫色の鼻緒で畳表のついた、当時としては希少な品だった。それを惜しげもなく下さった。私のその後の避難の道程も、下駄を履いていたから無事辿（たど）れたのだと思う。終戦後も記念として大切に収ってあったが、その後中国地方を襲った水害のため、疎開の地の玄関

先から流されてしまった。

山中先生は戦後、教育功労者として勲章を授与され、九〇余歳の天寿を全うされた。ご生前に一言お礼を申し上げたかったと、今にして悔やんでいる。

炎の中の校舎に心を残して家路に就いた。友と一緒だったのに、誰だったか、長い間思い出せないでいたが、同級生の池田洋子さんが消息不明だという話を聞いた時、はっと思い出した！あれは確かに池田洋子さんだった。己斐駅方面の彼女と広島駅方面の私と、紙屋町の市電の交差点で別れた時、彼女は殆ど無傷で元気だった。あれから何があったのだろうか。いまだに不思議でならない。

一人になって市電通りを目当てに瓦礫の道を辿った。焼け焦げた市電を何台も見た。墨絵のように何も彼も黒かった。ようやく我が家の焼け跡を見つけてがっかりした。焼けていないことを期待したのだ。家族はすでに疎開をしていたが、一人家にいる筈の姉の姿はなかった。

夕暮れが迫ったので姉と約束の金光神社目ざして歩いた。どの道を辿ったのか思い出せない。途中で自転車を押して歩いていた男の人と一緒に歩いた。焼け焦げて空洞になった広島駅舎の前で、行く方向が違うので別れた。

「気をつけて行きんさいよ」と、言ってくれた。顔も覚えていないが感謝している。

また一人になってうす暗い道を歩いた。神社に通じる長い参道の両側に、びっしりと死体が並べられている。思わず足がすくんだが歯をくいしばって、前ばかり見て歩いた。長い石段を昇った正面の本堂は焼け落ちていた。かたむきかけた母屋で、姉の消息を尋ねたがわからなかった。裏山に登って市街の方向を見下すと、果てしない闇の中で、大小の炎が点々と燃え盛っていた、まわりの暗い中から、避難した人達の話し声がする。駅前で配ってもらった乾パンを、ぼそぼそと食べた。

姉も私も、広島市内にいながら奇跡的に助かった。天祐を信じないわけにいかない。

あの日から五〇年になろうとしている。再び戦争をしてはならない！　絶対に!!

〝反核〟〝反戦〟〝平和〟

を叫び続けていきたい。

終わりに、原爆で亡くなられた大勢の方々のご冥福を、心からお祈りしながら筆をおく。